

九州医療科学大学 中期目標・中期計画 【第3期】

九州医療科学大学（大学院：社会福祉学研究科・保健医療学研究科・医療薬学研究科）

ビジョン (教育目標)	医療・福祉についての魅力ある学び、協働による学び、地域での学びを通して、人びとの幸せを創り出すことのできる人材を育てる。	
区分	全学共通目標	各研究科別計画・対策
教育力(使命・目的等を含む)	1) 3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化 学修者本位の学修支援体制の構築を目指し、学修成果を可視化することで、学生が自らの学びを振り返り展望することが出来る体制を構築する。	◆3つのポリシーを明確に示し、それらを踏まえた学修成果の可視化を図り、大学院生が自らの学びを振り返り展望することができる体制を構築する。 ◆時代のニーズに対応したカリキュラムおよび指導体制の検討・検証を引き続き行う。
研究力	1) 大学の強みや特色を活かした研究力の強化 地域における中核的な研究拠点として、本学ならではの強みや特色を活かした研究が推進できるよう、更なる研究環境の整備・改善を行うと共に、産学官連携を中心とする研究マネジメント体制の強化に取り組む。	◆各研究室や教員個々の研究力向上を図り、国内外の学術論文発表数を増やす対策を講じる。
募集力(ブランド力)	1) ブランド形成と募集力(ブランド力)の強化 ブランド形成のための各部署との連携、大学のブランドビジョンに沿った各部署、各部門、各学科の特色、魅力を明確にし学内外へ周知する組織的な体制づくりに取り組む。	◆定員充足を目指し、とくに社会人を対象にした広報活動に取り組む。 ◆各研究室や教員個々の研究・指導内容に関する情報発信を行う。
地域活性化	1) 地域活性化の為に拠点創生 地域における教育・研究の中核的な拠点として、地域ならではの特色ある人材育成や研究力や研究シーズを活かした地域社会の課題解決に取り組む。	◆大学院と医療・福祉現場との連携強化を図っていく。
2024年度の総評 (今年度の取組) 【定性評価スコア】 5. 達成している 4. かなり進んでいる 3. 普通 2. やや足りない 1. ほとんど進んでいない	教育力(使命・目的等を含む)	・社会福祉学研究科では、学習のしおりに教育方針として明示した3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を図る機会として、夏・冬期スクーリング時に大学院生および研究科教員全員参加による研究テーマ・計画・中間・成果発表会を継続して実施した。また、指導体制の充実を図る取り組みでは、新たな指導教員は加わらなかったが、先に加えた教員を希望する受験生が出てきた。 【定性評価スコア4】 ・保健医療学研究科では、院生の研究内容をWEBにて1時間ほど複数の教員で検討、研究内容・方向性を多次元で検討することができ大変有意義であった。 【定性評価スコア5】 ・医療薬学研究科では、大学院生の指導体制の確認を教授会や研究進捗報告会で行った。講義は、前年度と同様のカリキュラムで実施した。3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を図る目的で、大学院生が自らの学びをユニバ上で記録して自ら振り返って展望できる体制とした。また大学院生がこのような学びを自ら展開しやすいよう、大学院生のスケジュールに即した指導体制を展開した。 【定性評価スコア5】

研究力	・社会福祉学研究科では、査読付き国際1報（前年0）、国内5報（前年5）、紀要等1報（前年3）、報告書3報（前年2）であった。 【定性評価スコア3】 ・保健医療学研究科では、査読付き採択論文数は国内4報、国際10報であり、英語論文数が昨年を上回り質の向上が見られた。 【定性評価スコア4】 ・医療薬学研究科では、各大学院教員の研究の進展度を、薬学科と連携して引き続きリトリートにおいて可視化した。また薬学科と連携して各講座の研究力向上を図る目的で、前年度に引き続き、講座費が講座一律に措置された。これらの取り組みが現時点で即時的に学術論文発表数増加につながったという効果は確認できていない。しかし前年度に発表がなかった講座からの発表があったことや年度内での採択までには至らなかったが本学の査読付きジャーナルが投稿先として活用された事例があったことは望ましいことであった。査読付き採択論文数（2024年度中に集計された2023年度分）は、国際11報、国内2報、紀要等4報、総説・著書等14報（前年度は国際10報、国内5報、紀要等3報、総説・著書等11報）であった。 【定性評価スコア2】
募集力(ブランド力)	・社会福祉学研究科では、通信教育部のスクーリングを活用した広報活動を継続して実施した。通信教育部から博士（前期）課程への進学も促し、1名の進学者があった。次年度入学の入試において、博士（後期）課程では受験希望者と教員とのマッチングがうまくいかず1名の受験となったが、博士（前期）課程では定員を上回る8名の受験となった。 【定性評価スコア4】 ・保健医療学研究科では博士課程前期の入学者数が7名に増加し、入学定員数を満たした。 【定性評価スコア4】 ・医療薬学研究科では、社会人を対象とした広報活動を地域の薬剤師会や学会を通じて実施したが、今年度の入学者は0名であった。しかし今年度には1名の学部学生による大学院受験があった。教員と本格的な研究に取り組めた経験が進学意欲を湧かせたとのことであり、望ましいことであった。 【定性評価スコア1】
地域活性化	・社会福祉学研究科では、QOL研究機構社会福祉学研究所を活用した取り組みを継続して行い、社会福祉学部と連携して実施したイベント3件を活動報告書としてまとめ、公表した。 【定性評価スコア4】 ・保健医療学研究科では、宮崎大学医学部付属病院からの院生を受け入れ、大学病院との共同研究が進行中である。 【定性評価スコア4】 ・医療薬学研究科では、現時点で在籍する大学院生は勤務先の医療現場において責任ある地位に就いており、大学院生を通じて大学院と医療現場は連携できる体制となっている。地域の活性化に資するアウトリーチとして、薬学科と連携して開催された「宮崎県北サイエンスフォーラム」において、5名の大学院教員が研究内容をPRした。地域の薬剤師にも本取り組みへの興味を持っていただき、学外参加者は29名まで増加した（前年度4名）。 【定性評価スコア2】

2025年度への展望 (来年度の計画案)	教育力(使命・目的等を含む)	・社会福祉学研究科では、3つのポリシーを踏まえた学修成果の可視化を図る取り組みを継続して実施する。また、指導体制の充実を図る取り組みについても継続する。 ・保健医療学研究科では、引き続き院生の研究進捗状況を複数の教員でWEB検討を行い、指導教員と一体化した教育を行う。 ・医療薬学研究科では、次年度も指導体制を点検する。大学院生の満足度が高い教育力を維持していく。
	研究力	・社会福祉学研究科では、地域における中核的な研究拠点として、本学の研究経費助成・地域創生事業経費助成やQOL研究機構社会福祉学研究所の研究助成等も活用して、積極的な研究活動を促す。また、大学院生との共同研究も積極的に進めていく。 ・保健医療学研究科では、博士課程後期の研究内容を、本学の査読付き英文ジャーナルなどに投稿し国際研究力を向上させる。 ・医療薬学研究科では、各大学院教員が研究論文発表数を増やせるよう、今年度の支援体制を継続する。研究分野により1報の論文完成までの平均的な所用期間は異なるものの、各大学院教員が年1報程度は論文発表できることを目指す。最近数年間論文発表ができていない大学院教員には、引き続き、投稿先の選択肢として本学の査読付きジャーナルも奨める。
	募集力(ブランド力)	・社会福祉学研究科では、通信教育部のスクーリングを活用した広報活動を継続する。 ・保健医療学研究科では、修了生が集う場を設け、各自の後輩で研究意欲のある人材を確保すべく人材ネットワークの有効活用を試みる。 ・医療薬学研究科では、定員充足に向けて特に社会人が大学院に求めるニーズに応えていく必要がある。地域の病院/薬局に在籍の本学卒業生などを中心に学位取得のメリットをPRすることを継続する。
	地域活性化	・社会福祉学研究科では、社会福祉学部と連携して、QOL研究機構社会福祉学研究所を活用した地域活性化の取り組みを継続する。 ・保健医療学研究科では、地元の医療施設との共同研究により、さらなる地域の医療技術向上を図る。 ・医療薬学研究科では、今年度の活動を継続するとともに、地域における存在感を高められるよう、HPでも大学院教員の研究成果をPRしていく。地域の薬剤師会・病院薬剤師会/高校/中学と共同研究を行い、「宮崎県北サイエンスフォーラム」での発表などを通して地域との交流を広げていく。また同フォーラムへの学外参加者数が次回も連続して20名以上となるよう、地域の薬剤師が参加しやすいように、開催時期をより適切に設定して開催する。